

意味と意図が一致しない表現の選択理由

Why Use Expressions that don't Match Meaning and Intent?



公益財団法人日本漢字能力検定協会 現代語研究室長

佐竹 秀雄

国立国語研究所室長、武庫川女子大学言語文化研究所長（同文学部教授）を経て現職。武庫川女子大学名誉教授、日本広報協会広報アドバイザー。編著書に『デイリーコンサイス国語辞典』『サタケさんの日本語教室』『文章を書く技術』など。

✉ shinjin.sat@gmail.com ☎ 0798-68-4531

1 はじめにー意味と意図

次の2つの表現を比べてみよう。

- (1) 次回の会議、出席していただけますか。
 - (2) 次回の会議、出席していただけないでしょうか。
- これらが発話される一般的な場面を想定すると、(1)は「出席できるかどうかを尋ねている」であり、(2)は「出席してくれるように依頼している」だと考えられる。どちらも表現の形式としては疑問形をとっているが、その意図は、(1)が疑問の形式通りの質問であるのに対して、(2)は質問ではなく依頼である。(2)のように、表現上は疑問の形式を取りながら、その表現で意図するものが疑問や質問ではない場合は、この依頼以外にもいくつか存在している。

日本語において、このように、表現における表面上の意味内容が表現の意図と一致しないことは決して珍しいものではない。表現上の意味と話し手が伝えたい内容や意図とのズレの問題は、語用論の分野で扱われてきている。語用論における関連性理論では、会話におけるコミュニケーションは、発話の表す論理形式をもとに表現上の意味（表意と言う）をとらえ、その表意と文脈の相互作用から推論によって、発話に明示されていない伝達内容（推意と言う）をもとらえるとされる。

例えば、次のAとBの夫婦の会話で確認しておく。なお、タロウは夫婦の子供である。

- (3) A：タロウはジェットコースターに乗りたがるかな？
- B：タロウはこわがりなのよね。

Aの「タロウはジェットコースターに乗りたがるか」という質問に対して、Bは直接的な「乗りたがる」「乗りたがらない」という返答をしていない。しかし、Bの発言からは、言外の意味として「乗りたがらない」という返事が読み取れる。Bの「タロウはこわがりである」との発話に対して、「こわがりなジェットコースターに乗りたがらない」という推論が成り立ち、それによって、Bの発言に「タロウはジェットコースターに乗りたがらない」という推意を認めることができる。

このとき、「タロウはこわがりなのよね」の表意と「タロウはジェットコースターに乗りたがらない」の推意とには、あきらかな意味のズレがある。しかし、このような表意と推意との間にズレが認められるのは、特別なことではない。というより、現実の会話においては、この程度のズレは特に意識されないほど頻繁に出現するものであり、それは大きな問題もなく処理されている。

2 本稿の目的

上述のように、表現上の意味と伝えたい内容や意図とが一致していないことは、日常的に起こっているが、それでもコミュニケーション上、トラブルは起こらない。その理解のメカニズムの研究も進んできた。ただし、理解がそれなりにうまくいく理由の一つは、表現上の意味と伝えたい内容や意図とのズレが、状況や文脈における一定の範囲内の場合という条件が必要だろう。

先の「こわがりだ」という表意と「ジェットコースターに乗りたがらない」という推意とは、意味が一致してい

ないと言っても、文脈を踏まえた論理的な推論によって結びつけることはそれほど難しいことではない。文脈という存在が大きな役割を果たしているので、文脈のとらえ方を間違えなければ、誤解は起こらない。

とは言っても、いつも文脈が適切にとらえられ、誤解が起こらないという保証はない。誤解を防ぐためには、推論を踏まえた解釈が必要な表現よりも、それを必要としない表現の方が安全である。「こわがりだ」と答えずに「乗りたがらないだろう」と答えた方が確実に伝わる。それなのに、なぜ、送り手は自分が伝達したい内容や意図を直接表す表現法を用いないのであろうか。

表現上の意味と伝達したい内容や意図とが不一致の表現が出現する場面では、そのシーンごとにその表現を選択した理由が存在するだろう。それを分析することができれば、送り手が意図を直接表す表現を選択しない理由も明らかにできるかもしれない。しかし、具体的なシーンにおける表現選択の理由は個別的で多くの事情がからむ。それぞれの文脈や状況によって理由は異なり、普遍的な理由を求めることは困難だと考えられる。

本稿では、表現上の意味と伝達したい内容や意図とが一致しない表現のうち、表現形式と意図の関係が比較的固定的なものを分析の対象として考える。先の「こわがりなのよね」のような表現は、常に「ジェットコースターに乗りたがらない」という意味に結びついているわけではない。異なる文脈においても使用され、文脈ごとにさまざまな伝達内容になりうる。そのようなものではなく、表現と意図との結びつきが比較的固定しているもの、あるいは表現と意図との間にパターンが認められるもの、つまり、一般によく見かける、意味と意図が不一致の表現を取り上げる。そして、送り手はなぜその表現を選択するのかに焦点を当てて考えたい。また、その解釈がどのようにされるのか、さらに、そこにコミュニケーション上の問題点がないのかについて考える。

3 意味と意図の不一致のタイプ

意味と意図が不一致の表現で、表現に対する意図がある程度固定化、あるいはパターン化しているものの中から、特徴的なものを取り上げる。そして、そのような表現を選択、使用する意義の可能性を考えると同時に、解釈する側の理解過程にも考察を加える。

3.1 慣用句・ことわざ・比喩

まずは、表現上の意味と伝達内容の不一致の対象が、その表現全体ではなく、表現の一部をなす語句レベルのものを取り上げよう。

- (1) この不況をどう乗り切るか、経営者としてさぞ頭の痛いことだろう。
- (2) 壁に耳あり障子に目ありだから、データの管理には十分気をつけるように。
- (3) あいつの話し方はまるでマシンガンだから、圧倒されて何も言えなくなる。

(1) には慣用句「頭が痛い」、(2) にはことわざ「壁に耳あり障子に目あり」が使われていて、(3) の「話し方はまるでマシンガンだ」は比喩表現である。いずれも表現の文字通りの意味ではない。

これらの表現が選択されるのはなぜか。「頭が痛い」ではなく、「悩み苦しんでいる」と表現して何の問題もないはずである。同様に「壁に耳あり障子に目あり」ではなく、「秘密は漏れやすい」でよいし、「まるでマシンガンだ」ではなく「口数多く、まくしたてる」と述べれば意味が平明になるし、意図の伝達も確実である。それにもかかわらず、慣用句、ことわざ、比喩を使う理由はどのような点にあるのだろうか。

一般的な理由として考えられるのは、表現の豊かさの利用である。表現に慣用句、ことわざ、比喩を加えることで、表現にアクセントができる。送り手にとって、伝達上のことだけを考えれば、平明な表現を使えばよい。だから、これらを使うことは、送り手が伝達以上に自分の表現面を重視していることを意味する。そのような表現をすることで、送り手は自分の表現力を示すと同時に、受け手になんらかの表現効果を生じさせることを期待していると思われる。

ことわざは、別名「たとえ」とも呼ばれることからわかるように、比喩の要素を色濃くもっている。また、慣用句も「骨が折れる」「猫の額」「油を売る」といった例からわかるように、慣用句の意味が文字通りの意味のたとえになっているものが多い。これらの使用理由の要因に、「たとえ」という表現上のレトリックがあると考えるとわかりやすい。つまり、これらの表現技法は、文字通りの意味とたとえられた意味という表現の二重構造が表現効果と結びついている。表現で使われるたとえが作り出すイメージと伝達したい内容によるイメージが重

なって受け手に伝えられる。単一のイメージではないことによって、受け手がイメージを膨らませ、送られてきた情報に深さを感じる効果が期待できるのである。

3.2 挨拶

次は、表現上の意味と伝達したい内容や意図とは一致していないにもかかわらず、その関係が最も固定的なものを取り上げる。それは挨拶である。

(4) おはようございます。

(5) おやすみなさい。

(6) いいお天気ですね。

表現上の意味は、(4)は「早いですね」という確認あるいは相手への同意要求と読める。(5)は「やすめ」という命令の尊敬表現である。これらは朝の出会いの挨拶、夜の就眠時や別れの挨拶として決まった形で習慣的に使われており、送り手は単に挨拶する意図で使っているにすぎない。あえて挨拶の意図と言え、人間関係を円滑にすることであろう。挨拶をしないと自分と相手の関係を良好に保てなくなる可能性があるときは、挨拶は意識して行われるが、それ以外は、ほぼ無意識のうちに行われる。また、受け手側にしても、表現がほぼ固定化されているので、特に解釈に悩むことはない。

(6)は2人が出会った際の発話で、(4)や(5)に比べると形式は固定化されていない。しかし、その意図は、(4)(5)と同じく人間関係の調整である。(6)の表現上の意味は「天気がよい」という事実の叙述であるが、その事実を伝達することが目的ではない。発話すること自体に意義が認められる行為である。

これらはいずれも表現と意図とがほぼ固定的に結びついている、もしくは、その表現の無意味さから、表現と意図とがズれているとの認識がない。そのため、コミュニケーション上で問題が起こることもない。

3.3 疑問形

疑問形は、挨拶ほど表現と意図との結びつきが固定的だとは言えない。使われる表現が挨拶のように常に同じ形で使われるわけではない。しかし、その表現形式がパターン化していて、その表現形式による意図との対応がパターン化している。例を示そう。

(7) ペンを貸していただけますか。

(8) 私の車で一緒に行きませんか。

(9) 君はなぜすぐに実行しないのか。

(10) 誰が社長に反対できるでしょうか。

(11) (文章中で) この現象の原因は何か。

上の(7)の意図は「ペンを貸してくれ」という依頼である。(8)は「一緒に行くこと」を提案、もしくは、勧誘している。(9)は「相手が実行しないこと」に対して、非難、叱責をしている場合、あるいは、「実行しろ」と命令している場合もありうる。(10)は「誰も社長に反対できない」と主張、あるいは断念の表明である。(11)は文章中の一節に書かれたものをイメージしてもらいたいが、これが述べられた後、現象の原因についての説明が展開される場合である。つまり、(11)の表現は問題提起の役割を果たしつつ、同時に、読者にその後展開される内容を予告する役割を果たしている。

以上、いずれも疑問形式であるが、意図は相手に対する質問ではない。では、送り手は、なぜ次のような表現形式をとらないのだろうか。

(7*) ペンを貸してください。

(8*) 私の車で一緒に行きましょう。

(9*) 君はすぐに実行しなさい。

(10*) 誰も社長に反対できません。

(11*) (文章中で) この現象の原因を以下に述べる。

これらの表現と、疑問形式の表現との違いについて考える。以下、例文を再掲しながら説明を加える。

(7) ペンを貸していただけますか。

(7*) ペンを貸してください。

この2つを比べると、(7*)の方が直接的な表現であり、(7)の方が待遇度の高い敬語表現という違いがある。この待遇度の高さは相手との関係によるものであろう。相手が親しい友人であれば「ペンを貸して」で済む。(7*)は相手が友人レベルよりも目上、もしくは親しみのない人物であり、(7)の相手はさらにそれよりも目上ないし親しくない人物の場合である。つまり、(7)が選択されたことには、待遇に配慮しているという意味がこめられている。疑問形式の使用には、待遇度を高めるという機能があり、それを利用した表現の選択なのである。よって、この表現の解釈においても、「ペンを借りたい」という意味の理解だけでなく、待遇度の高い表現を使われている事実を認識することが、理解の要件となる。

(8) 私の車で一緒に行きませんか。

(8*) 私の車で一緒に行きましょう。

受け手が異なる言語意識を持っていれば、解釈のズレが生じることになる。

3.5 事実の表明

最後に事実の表明を取り上げる。事実の表明で、事実を伝えることが最終目的なのではなく、事実の伝達によって受け手になんらかの変化を与えようという意図をもったものである。先に述べた疑問形ほどの決まったパターンがあるわけではない。しかし、表現と意図との関係に関して、同じタイプのものが繰り返し見られる。

(14) (広告などで) この商品のお客様満足度は95%です。

(15) (人物紹介で) 全国大会で優勝していらっしゃいます。

(16) (外から帰ってきた子供の発言で) のどが渴いた。

(17) (部下に会長のようすを伝えるとき) 今回の事態について会長はお怒りでございます。

(14) は広告表現などに見られるもので、「商品のお客様満足度が95%である」という事実を受け手に伝えているのだが、意図はその情報伝達にあるのではない。それを通して、「客の満足度が高い商品はよい商品だから購入しよう」と思わせること、あるいは、「その商品を扱っている会社はいい会社」というイメージを受け手に植え付けること、それが真の意図である。

(15) は、「全国大会で優勝した」というその人物の経験を伝えることが目的ではなく、その事実を通してその人物の有能さを訴えている。(15)の表現はその証拠となる事実の紹介である。そして、有能さを伝える以上に、その人物に対する受け手のイメージをよくすることが目的だとも言える。

(16) は、子供が自分自身ののどの渴きという事実を訴えている表現だが、実際の意図は「飲み物の要求」である。(16)の延長、拡大版が(17)である。X氏の怒りという事実を伝える裏に、怒りを鎮める手立てを講じるように求めている意図が存在する場合もある。

(14)～(17)は、事実の表明を通して、送り手がねらいとするイメージを受け手に与えたり、送り手が期待する行動を受け手に起こさせたりする意図が含まれている。そして、その意思を直接的な表現ではなく、事実によって婉曲的に表現するという共通点がある。もちろん、解釈には文脈や状況が大きくかわる。否、文脈や

状況の助けがあるからこそ、送り手は安心して、意図そのものを表現しない婉曲的な表現が成立するのだ。

そもそも事実の表明は、事実を伝える目的だけの場合はほとんどないだろう。事実は受け手に何か行動を起こさせたり、感情的な変化を与えたりする力を持っている。直接に指示、命令をする表現と同等の力、あるいはそれ以上の力を持っている。感情的な面については、ことばで「楽しくなれ」「悲しくなれ」のような直接的な指示はできない。事実の表明でこそ感化的な効果をもたらすことが可能になる。

その力や効果を、送り手が常に意識しているとは限らないが、ここで取り上げたのは意識している可能性が存在している場合である。受け手もその効果を認識しているからこそ、コミュニケーションが成立するのである。

4 送り手による表現選択の要因

3.1～3.5で、表面上の意味と意図とが一致しない表現が使用されるシーンを取り上げてきた。ここで、送り手がなぜそのような意図と一致しない表現をしようとするのかについて整理してみる。

慣用句・ことわざ・比喩は、表現のレトリックであり、表現効果をねらって行われると考えられた。ただし、慣用句の多くは、特別な語句という意識はなく、意味のズレに関する意識もないと思われる。ことわざや比喩の使用についても、表現の実質的な意味と伝達内容のズレという意識はないと考えられた。

挨拶における表現は、ほぼ慣習によって行われている。人間関係の調整という意図すら送り手の意識にないことが多く、単に習慣的に行っている。これも送り手にとって無意識に生じる表現と意図の食い違いと考えられる。

疑問形を使う場合には、いくつかの理由や要因が考えられた。依頼や命令の意図を疑問形で表現することでは、相手に対する配慮や敬意を示せた。相手に断りの余地を与えるために疑問形を使用することも配慮であった。それらとは逆に、反語のように意味を強調する効果をもつものがあり、送り手がより強い表現をしようとする表現戦略として使うこともできた。さらには、文章や段落の冒頭に置くことで、表現上の役割を果たす効果もあった。疑問形の使用の理由は、形の上では意識的な戦略的表現ということができる。

感想による意見の陳述には、断定回避やボカシ表現につながる要素が見られ、送り手が自分の立場を守る意識を認めることができた。これは、まさに表現効果をねらった戦略的な表現と言えよう。

事実の表明で取り上げたものは、いずれも婉曲的な表現によって、送り手が自分の目的を達成しようとするものであり、表現効果をねらった戦略的な表現である。

以上を表に示すと、次のようになる。

表現の形式	使用の要因
慣用句・ことわざ・比喩	表現効果（無意識的）
挨拶	慣習（無意識的）
疑問形	表現効果（戦略的）
感想の表現	表現効果（戦略的）
事実の表明	表現効果（戦略的）

これを見ると、意図と不一致の表現の選択使用の要因には、「挨拶」を除いて、表現効果をねらった戦略的な表現が存在している。ただし、「慣用句・ことわざ・比喩」の場合は「表現効果」を意識した使用はなさそうである。

5 おわりにー戦略意識の消滅

以上を踏まえて、「表現効果をねらった戦略」に関して述べておきたい。

「表現効果をねらった戦略」は、確かに意味と意図が不一致の表現を使用する主要因ではあるが、現実の使用場面では、要因としての働きが薄れている傾向が見てとれる。「慣用句・ことわざ・比喩」の使用では、機能としては表現効果があるはずなのに、実際に使うときにはほとんど意識されなくなっていた。それと同様のことが、「疑問形」「感想の表現」「事実の表明」でも起こっている。

例えば、「疑問形」では次のような表現が頻出する。

(19) ペンを貸してもらっていいですか。

かつては、「3.3 疑問形」で説明した

(7) ペンを貸していただけませんか。

という謙譲語を使った表現が使われていた。ところが、近年、このような依頼のシーンでは、(19)の形式「してもらっていいですか」が多く使われる。(19)には尊敬語も謙譲語もなく、敬語としては「です」の丁寧語だけである。敬意は(19)の方が(7)よりあきらかに低い。かつてなら、敬意が低く失礼だとされていたはずの「してもらっていいですか」が定着しつつある。日本語文化

の特徴であった敬語使用にほころびが生じている。敬意や配慮による表現効果を重視しなくなっているというより、表現効果を意識しなくなっていると言った方が正しい。「依頼の場面では、「〇〇してもらっていいですか」と言えばよいのだ」と考えている。周囲の人々と同じ表現をしておけば無難だという意識の表れだろう。

「感想の表現」は、(12)や(13)の「～たいと思います」「～なと思います」で説明したように、自分の身を守る戦略と認められる表現が好まれていた。しかし、さらに最近は、その戦略意識が感じられなくなっている。自分を守る必要がなく、強い意思を表現するときにも、「～たいと思います」「～なと思います」が使われる。「自分の意思や主張を述べるときは、「～たいと思います」「～なと思います」と言えばよい」と考えているようだ。

「事実の表明」でも同様のことが起こっている。婉曲的な表現を選択する理由は、表現効果をねらった戦略ではなく、単に「そのような場面ではそういう言い方をするものだ」という意識が強く感じられる。

「疑問形」「感想の表現」「事実の表明」は、送り手が言語効果を意識した戦略的な表現のはずであった。それが近ごろは、送り手が「この場面ではこの表現を使うのが一般的だ」という意識で使用するようになっていく。まるでマニュアル化されているかのようである。かつては、意図と一致しない婉曲的な表現を使うことは、表現効果をねらう戦略であり、日本語文化の一つでもあった。その表現選択における戦略意識がなくなって、惰性的な慣習になりつつある。「挨拶」化して、意味と意図が一致しない表現の意義が失われている。今こそ、戦略的な表現の意味を改めて教育する必要がある。

参考文献

- [1] 佐竹秀雄, 若者ことばとレトリック, 日本語学 14 - 12, 1995
- [2] 佐竹秀雄, 若者ことばと文法, 日本語学 16 - 4, 1997
- [3] 東森勲・吉村あき子, 『関連性理論の新展開ー認知とコミュニケーションー』, 研究社, 2003